

発掘調査の概要

檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第180次）

檜隈寺は渡来系氏族である東漢氏^{やまとのあや}が7世紀に建立したとされる古代寺院です。檜隈寺周辺を含めて計画された国営飛鳥歴史公園（キトラ古墳周辺地区）の整備事業にともない、奈良文化財研究所が国土交通省の委託を受けて2008年度から発掘調査を継続的に実施しています。

今回は檜隈寺金堂南側の丘陵上と、南東の丘陵斜面をその下部まで295㎡を発掘調査しました。檜隈寺周辺では、北・東側で古代の遺構が多くみつっているいっぽう、南側の状況は良くわかっていません。今回の調査の主な目的は、回廊東南隅の状況や金堂南側の遺構の確認でした。

調査の結果、金堂南側の丘陵上や斜面下部では主に中世初頭の掘立柱建物や土坑・溝を、斜面中腹では古代の掘立柱建物・堀を検出しました。この地域は中世以降には水田化しますが、その過程で丘陵頂部の古代の遺構は回廊の一部を含めて削平され、中世以後の遺構が残されていきます。檜隈寺では平安時代後期頃、木塔跡に十三重石塔が建立され、講堂基壇の改修がおこなわれていることがわかっています。今回の中世の遺構も、この時期の檜隈寺の利用状況を示すものとして重要でしょう。

また、丘陵中腹には削平がおよんでいない場所があり、そこには古代に地山を削って平坦面をつくり、建物や堀を建てていたことが判明しました。一部の遺構は調査区外に延びています。こうした知見は、檜隈寺の南側において古代の遺構がどのように展開していたかを知る貴重な手掛かりとなるものです。

（都城発掘調査部 森先 一貴）



丘陵中腹での古代の建物と堀（東から）

平城京左京三条一坊一坪の調査（平城第522次）

平城京左京三条一坊一坪は、平城宮朱雀門の東南すぐに位置します。ここに国土交通省による平城宮跡展示館の建設が計画され、事前調査として奈良文化財研究所が2010年度より継続的に発掘調査をおこなっています。

これまでの調査により、この坪は、平城京遷都前後のわずかな期間を除き、構造物があまり存在しない広場的な空間として利用されていたことが判明しています。今回の調査は、一連の調査の最後のものとして、坪の東端に近い箇所に東西21m×南北93mの調査区を設定しておこないました。

調査区北端から遺構検出を始め、南へと作業を進めていったところ、調査区北部では数棟の建物跡が見つかりました。しかし、北側三分の一を過ぎると、顕著な遺構がほとんど認められなくなりました。構造物が少ない広場的空間という坪の様相が、改めて確かめられたのです。

遺構の乏しさが既往の知見を裏づける成果になるとは楽な調査だ、と思われるかもしれませんが、しかし、実際は、地面を睨みつけては神経ばかりをすり減らす調査でした。遺構が《ある》ことより、《ない》ことを証明する方が難しいものです。もしも、何か重要な遺構を見落としていたら——調査中はそんな恐怖におののく日々だった、とは少し大袈裟すぎるでしょうか。

もちろん調査には万全を期しており、この坪の遺構密度が低いことは疑いありません。官人の宅地としての性格を基本とする平城京で、坪全体を広場として確保する事例は珍しいものです。一連の調査により、平城京における土地利用の多様さの一端があきらかとなりました。

（都城発掘調査部 山本 祥隆）



調査区全景（北から）